



平成 29 年 7 月号 (第 41 卷第 3 号・通巻第 167 号)



右絵は岩崎灌園『本草図譜』に描かれたキョウ

杏 (キョウ)

バラ科アズミは中国北部原産で高さ 5 ～ 10 m の落葉高木。古くから栽培される。春に淡紅色の花を付け、果熟期に種を取る。品種により、苦みのある種を苦杏仁と呼び薬用

に、甘みのある種を甜杏仁と呼び食用に用いる。種子を「杏仁」と称し、漢方では咳嗽、喘息、便秘などに用いられ、麻黄湯や麻杏甘石湯などに応用される。(坂田 幸治)

変形性膝関節症の鍼灸治療

鍼灸診療部 井田 剛 人



梅雨空の下、体の節々の痛みが気になり、気象予報士さ

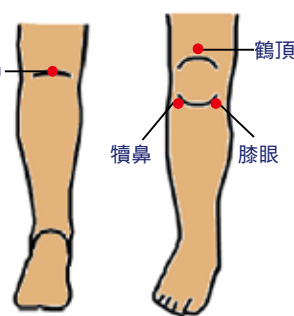
ながらに気圧の変化を的中させる方も多いのではないのでしょうか。特に膝の痛みは日本人に多く、理由としては畳式の生活様式や、O脚になりやすい骨格などが原因となり発症しやすいと考えられています。年配者の膝痛の原因として多い変形性膝関節症は、我が国において予備軍を含めると 2530 万人もの患者がいるといわれており、今後超高齢化社会がさらに進行するにあたり、予防や治療を考えるべき疾患の一つと考えられます。変形性膝関節症を詳しくみてみると、男女比では 1.2 で女性に多くみられ、また年齢とともに頻度は高くなり、70 歳代では男性の 30 ～ 40%、女性では 50 ～ 60% 程度の罹患率と

の報告があり、日常生活の QOL (生活の質) を低下させる主要因となっています。平成 27 年の厚生労働省の国民健康・栄養調査によると、運動習慣のある者の割合は男女共に 70 歳以上が最も高く、高齢になる程、運動への意識が高いという結果でした。運動時に損傷する部位別の発生頻度を調べた別の調査では、膝が最も多く、次いで足関節、腰、肩と続く報告もあります。当治療センター鍼灸外来の受診状況をみると変形性膝関節症は男女共にみられますが、女性の方が男性に比べて約 2.5 倍となっており、関節疾患の中でも特に女性に多い疾患となっています。変形性膝関節症は、加齢、外傷、肥満、炎症などさまざまな危険因子により関節軟骨の代謝バランスが破

綻し、軟骨の変性および損傷による摩擦が進行して発症する多因子疾患です。軟骨の摩擦が進行すると関節の隙間が狭くなり、関節内に炎症を生じ、水が溜まる関節水腫、関節包の肥厚などを引き起こし、更に進行すると膝関節の変形や拘縮といった結果となります。変形性膝関節症に対する治療法に関しては、外科的治療もありますがほとんどは痛みや症状の改善を目的とする対症療法であり、原因療法や進行を抑制する治療法の確立には至っていないのが現状です。日本整形外科学会からは、運動療法や減量、生活様式の変更などが推奨されており、特に大腿四頭筋の筋力を鍛えることが重要であるとされています。

変形性膝関節症の鍼灸治療では、膝関節の炎症や、関節内の水腫の抑制をはじめ、膝の運動に関わる筋肉の疲労や緊張を取り除くことを目標としています。2006 年に全日本鍼灸学会主催で開催された「エビデンスに基

づく変形性膝関節症の鍼灸治療」という国際シンポジウムで、鍼灸治療は有効性も高く、しかも安全であることが示されました。実は世界的にみても治療に鍼灸を積極的に取り入れている国が多いのです。当施設の鍼灸外来においても変形性膝関節症に対する治療を数多く行っております。実際の治療では、経絡を整える全身治療に加え、局所治療として犢鼻、膝眼、鶴頂、委中などのツボを用いて、膝関節や膝周囲の筋肉の緊張を取り、疼痛を緩和することでQOLを改善させています。



変形性膝関節症は主に加齢によるものですが、昨今では運動による膝の痛みも増加傾向となっております。怪我をする前の予防や、コンディションの調整にも鍼灸治療は有用性があると考えられています。転ばぬ先の杖ならぬ、転ばぬ先の鍼を活用してみたいかがでしょうか。

「ICT技術を活用した高齢化社会への対応」に関する日中会議

東洋医学総合研究所 所長 小田口 浩

本会議は、中国科学技術協会(CAST)と国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が主催し、中国電子学会が実施機関となつて、既に超高齢社会(65歳以上が21%以上を占める社会)となつて

いる日本、そして現在は高齢化社会(同7~14%)だが近い

議論を戦わせながら進行しました。当研究所からは、漢方診療部の川鍋医師と私が参加しました。

具体的には「スマート技術に関する政策・戦略」、「医学、リハビリテーション・治療におけるスマート技術の応用」、「日常の保健、運動検測におけるスマート技術の応用」、「人口知能とスマートロボットに関する研究開発・産業化」、「高齢者・身体障害者サポート用ロボットの研究開発」、「日中協力の可能性と見通し」の各テーマについて、日本と中国の双方から演者が講演し、質疑応答を行うという形で会議が進められました。今回驚いたのは、中国が種々の分野におけるICT利用に貪欲であり、めざましい研究開発を行っているという点です。具体的には、都心から遠く離れた僻地の人々の乳癌検診を行うため非常に繊細なセンサー機能を持つ診断装置が開発されていたり、介護ロボットの存在や働きやすさまで考慮に入れたスマートホームの

研究開発が行われていたりしており、日本が学ぶべき点が多いと感じました。

我々は現在、JSTなどの支援を受けてICTを用いて漢方診療を標準化するセクターオブイノベーション(COI)プロジェクトに取り組んでおりますが、今回の会議ではその成果の一部を発表しました。具体的には、漢方診療で行われる舌診、脈診、腹診といった診察方法を客観化し、医師の頭の中で行われている診断過程を見える化するために必要な研究とその進行状況について提示し、出席者と議論を行いました。漢方医学の源流は中国にありますが、中国ではまだこのような研究が本格的に行われておらず、我々の研究に対する熱い視線を感じる機会ともなりました。我々が最終的に目指すのは、皆さんが家庭で体重や体温、血圧を測って健康管理をしているように、家庭で簡単に漢方的な健康チェックができるようなシステムの普及です。たとえば、近い将来、家事口

ロボットは一家に一台あることが当然となつているかもしれませんが、このロボットと握手したり、抱き合ったりすることで、皆さんの脈の状態やお腹の状態がわかり、病気の予防のために飲むべき漢方薬まで教えてもらえるような時代が来ることを期待しています。

今回の会議参加者は、ICTは非常に進歩が速く、高齢化社会への対応に有効であることを共通認識とし、今後日中間でこのような対話や研究を深めること、多様な形の協力を行うことに合意しました。



発表中の川鍋医師

第4回日本漢方国際シンポジウム
(ISJKM)に参加して
漢方診療部 医長 川鍋伊晃

未だ肌寒さが残る中、春を迎え緑が芽吹き始めたドイツのベルリンで、「日本漢方の伝統・現代的評価・包括的患者ケア」をテーマに、第4回日本漢方国際シンポジウム(ISJKM)が5月に開催されました。

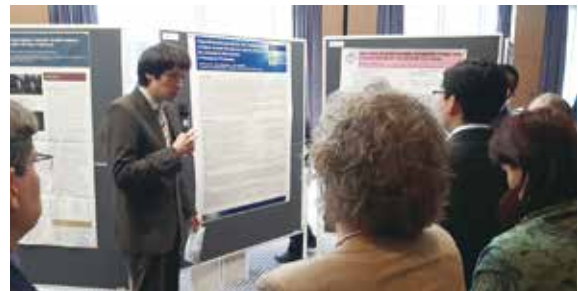
ISJKMは、北里大学東洋医学総合研究所において花輪教授のもとで研修されたドイツ人医師のライセンウエーバー先生をはじめとする複数の臨床家を中心となり、欧米での漢方医療の普及を目指して、2009年に設立されました。ヨーロッパで定期的に総会が開催され、今回で4回目になります。漢方医学の研究や診療に精力的に取り組んでいる複数の日本の施設から、多くの研究者や臨床医が集まり、80名を超えるヨーロッパやアメリカをはじめとする世界各国の医療

関係者に対して、各専門領域の活動が紹介されました。

基調講演として、ライセンウエーバー先生から、ドイツ国内における漢方医学診療の実際について日本との比較を交えながら紹介され、伝統医学のさらなる普及と発展のために、用語や診断プロセス標準化の重要性、漢方医学の現代医学的



基調講演の様子



演題発表の様子

観点からのエビデンスや有用性、医療従事者のための教育プログラムの必要性などが提示されました。また、他の複数の欧米の参加者からも、漢方薬の有用性に関する臨床研究や医史学研究など多岐にわたる内容が報告されました。

今回当研究所からは私が参加し、漢方医学の客観化の取り組みについて発表しました。この誌面でも漢方診療における診断サポートを目的としたセンサー開発について何度かご紹介させていただいておりますが、

文部科学省のCOIプロジェクトにおいて進めている、脈診・舌診・腹診の客観化に向けた診断サポートシステム開発の現状を紹介しました。個人の感覚にたよる部分の大きい視診や触診の所見の客観化を可能とするセンサーを作るため、多くの課題と向き合いながら試作機の改良を重ねてきたことや、ISOにおける

センサー要素技術の国際標準化の必要性に関する報告を行いました。

本シンポジウムを通して、今後のさらなる漢方医学の国際化を考える上で、基礎と臨床、伝統医学と現代医学を融合させ、様々な研究成果を継続的に国内外に発信し続けることが重要であることが改めて認識されました。

日本薬学会第137年会が早春の仙台で開催
～東医研からも発表～
基礎研究部 室長補佐 永井隆之

日本薬学会第137年会が、本年3月24日(金) 27日(月)の4日間、時折雪の舞い散る早春の仙台市で開催されました。会場としては、JR仙台駅から仙台市営地下鉄東西線で約5分の国際センター駅に直結した仙台国際センター、隣の川内駅から徒歩約10分の東北大学百周年記念会館川内萩ホール及び東北大学川内北キャンパスの3カ所を用いて行われました。会場

間の移動は徒歩のみで、国際センターから東北大学方面へは約10分の上り坂で移動が少し大変でした。第137年会組織委員長は遠藤泰之東北医科薬科大学薬学部教授で「復興と発展、薬学の未来へ」がテーマに掲げられました。年会では「くすり」に関する物質から教育まで幅広い領域での研究成果が報告され、七千名を超える参加者がありました。東洋医学総合研究



仙台国際センター会場

所の臨床研究部と基礎研究部では、漢方薬及び生薬に関する基礎研究の成果を毎年日本薬学会年会で発表しており、今回も7題の一般演題の発表を行いました（○内山奈穂子、合田幸広ら「エフェドリンアルカロイド除去麻黄エキス（EFE）製剤の安定性に関する研究(1)」、○日向須美子ら「麻黄によるEGFR-TKI耐性肺がん細胞におけるMet発現のダウンレギュレーション」、○中森俊輔ら「Formalin誘発性疼痛に対する麻黄、EFE、ephedrine、pseudoephedrineの鎮痛作用の解析」、○竹元裕明ら「麻黄によるマウス強制水泳試験の不動時間短縮におけるエフェドリンアルカロイドの作用様式」、○伊藤直樹ら「社会的ストレスによるうつ様行

動の再発に対する漢方方剤「香蘇散」の防止効果」、○出原麻由ら「構成生薬の異なる補中益気湯煎剤の呼吸器粘膜免疫系調節作用の比較解析」、○廣瀬栄治ら「慢性社会的敗北ストレス負荷及び香蘇散煎剤投与によるBALB/c×C57BL/6



仙台（青葉）城址の伊達政宗公騎馬像

マウスの免疫系に対する作用の比較)」。今後、これらの基礎研究の成果を患者様の治療に応用できるように、さらに研究を進めていく予定です。また、本年会では、2015年の本学、大村智特別栄誉教授に続いて、昨年、ノーベル生理学・医学賞を受賞した大隈良典東京工業大学栄誉教授により「酵母から始まったオートファジー研究」という演題で受賞記念特別講演が行われ、多くの聴衆を集めました。今回の第138年会は来年3月25日～28日の4日間、金沢市で開催される予定です。



「女性と漢方を知るセミナー」

EBMセンター

関根 麻理子

を主催して

2017年3月23日に白金キャンパス内で出産に携わる医療職向けに「女性と漢方を知るセミナー」を開催しました。本セミナーは「漢方は女性の健康をたす

ける」をテーマに、55名の助産師・看護師・保健師等が参加しました。当日は二部構成で、第一部は当研究所の紹介から始まり、資料室見学・パネル展示・漢方

薬試飲・腹診体験など、漢方をもっと身近に感じてもらうための趣向を凝らし、第二部では当研究所教授の花輪壽彦が「母乳と漢方、産前産後の漢方」と題して、漢方における乳汁分泌促進法や不妊症、産前産後のトラブルと漢方の有用性などについてお話ししました。多くの参加者から「漢方に対するイメージが変わった」「今後の業務に漢方を取り入れたい」などのご感想をいただきました。

本セミナーのテーマにありますように、漢方は女性に親和性が高く、今回は産前産後と妊娠にまつわるお話でしたが、他にも月経



第一部 漢方薬試飲説明の様子



第二部 花輪教授の講演風景

前症候群や月経困難症、更年期障害など、女性特有の疾患に有用です。医療従事者は漢方についての正しい知識を持ち、より多くの患者さまに活用していただきたいと思えます。そして、患者さまにもぜひ漢方のことを知っていただき、少しでも健康に役立てていただけたら嬉しいのです。なお、当日の講演内容は、毎日新聞・医療プレミアア (<https://mainichi.jp/premier/health/>)に「妊産婦の心強い味方 産前・産後の漢方」(前編・後編)として掲載されておりますので、ご興味のある方はぜひ

ご覧下さい。
※本セミナーは、北海道大
学「食と健康の達人」拠点
主催の北里大学COIプロ
グラムの一環で実施して
おります。

アンケートの結果について

事務室 事務長 石渡和久



いつも東洋医学総合研究
所をご支援いただきまして
ありがとうございます。

漢方鍼灸治療センターで
は、1月16日から3月31日に
かけて、アンケートを実施し
ました。漢方治療や鍼灸
治療では、長期間継続して治
療されている患者様が多く
おられますことから、今回は
3回目の受診をされた患者
様(男性41名、女性84名合計
125名)を対象とし、治療を継
続するにあたっての当セン
ターに対する「要望を伺い
ましたところ、最も多かった
ご要望は「診療費やお薬代が
高い、保険診療してほしい」
で39名、実に3分の1の患者
様からいただきました。

当センターご利用のきつ
かけ(複数回答)につきまし
ては「本格的な漢方・鍼灸治

療が受けた(86名)」「西洋
医学で改善しなかった、悪化
した(41名)」とお答えいた
だいた患者様が多かったです。

西洋医学の治療では分野
が専門化・細分化しているた
め、患者様の心身を一体的・
総合的に診療することは難
しくなっており、漢方治療は
その部分を補う治療手段と
して、期待されております。

最近では多くの西洋医学の
病院・診療所でも漢方薬がよ
く使われるようになりまし
たが、そのほとんどが健康保
険の適用できるエキス製剤
であるため、当センターで処
方されるお薬と同じ名前の
お薬を使用しても十分な
効果が現れないことが多
く見受けられます。

当センターでは、高品質な

生薬を用い、患者様ひとりひ
とりの身体の状態に合わせ
たお薬を漢方の専門医が処
方し、生薬に精通した薬剤師
が調剤しております。なか
か改善の見られなかった症
状が改善されたという患者
様のお声も数多くいただい
ております。

しかしながら、保険診療で
は処方できる生薬の品目数
と購入金額には制限がある
ため、伝統的な治療方法で最
良の治療効果を上げるため
には、これらの制約を受けな
い自由(自費)診療という形
態を選択せざるを得ません。
患者様にはなにとぞご理解
いただけます様お願いいた
します。

なお、本件以外にも多くの
ご意見をいただきました。ご
協力いただきました患者様
にはこの場を借りて御礼申
し上げます。ありがとうございます。
今後もいただきましたご
意見を参考に、より良い診療
環境作りに努めてまいります。

「漢方体験教室」開催のお知らせ

事務室 係長 新地敏博



今年の夏も猛暑の予想が
出ており、夏バテ対策など
の健康管理に気が抜けなく
なりそうですね。

さて、当研究所では平成29
年7月より「漢方体験教室」
を開催することとなりました。

本教室では、毎回1つの
疾患を取り上げ、その疾患
に対して効果的な漢方薬や
養生法について、当研究所
のスタッフが一般の方々
にもわかりやすく説明を行
います。

教室の内容は、テーマに
取り上げた疾患についての
漢方的な考え方を紹介し、
煎じ薬の優位性に触れつ
つ、適応処方や養生を解説
する「漢方薬講義」、実際に
煎じ薬を試飲し、香りや味
を体験していただく「漢方
薬試飲」、皆様からの質問に
医師や薬剤師がお答えする
「Q&Aコーナー」で構成

され、全部で40分程度とな
る予定です。

開催日は隔月で月に一度
土曜日12時30分から白金
キャンパス内アネックス棟
の東洋医学総合研究所2階
にあるセミナー室で行いま
す。

記念すべき第1回目は7
月15日です。テーマは「胃
腸病と漢方」で、当研究所
副所長の及川先生が担当
いたします。

この記事を書いている段
階(5月下旬)では、まだ
決まっていない点もあり、
詳細を記すことが出来ませ
んが、皆様がこの記事に目
を通される頃には、院内の
掲示などで詳細をお知らせ
出来ていることと思います。
この教室に参加していた
だく事で、漢方薬への理解
を深めていただくことに
、皆様の日常の健康管理
のお手伝いが出来ればと

思っております。
現在、漢方薬を飲まれて
いる患者様はもちろんです
が、周りに漢方薬に興味を
持たれている方がいらつ

患者様からの寄稿

米寿のお祝い

中嶋悦子（山下悦子）



治療室に新人さんが介助
についたときは「あなたが
生まれる前から来てるの
よ」と威張って言う。

何しろ漢方からの始まり
は大塚恭男先生、旧建物の研
究所時代だから表彰ものだ
ろう。現在は水曜日午前中の
週間スケジュールに組込ま
れていて、石野尚吾先生とは
三十一年の長さである。

小学五年生のときの盲腸
の傷跡は約十センチ、二十
四才の帝王切開は縦に十七
センチを越え、平成二年のリ
ウマチによる膝（人工関節
置換）は十二センチあまり。
白内障はもちろんのこと、
犬の散歩の近くの駒場東大
裏門で転倒、後頭部裂傷の
ため縫合九針、二十四年に

しゃいましたら、お誘い合
せの上、ぜひご参加くださ
いますよう、お願い申し上
げます。

も転倒して左後頭部打撲に
よる硬膜下出血で日赤病院
に二十日間入院というまじ
に「傷だらけの人生」である。

女学生時代は勤労働員の明
け暮れ、昭和二十年の東京
空襲爆撃で東京千駄ヶ谷の
我が家は焼失、戦後の食糧
難にも何とか生きのびた。

戦後三十年あまり続けて
きたきもの教室、茶道教室



旧白金プリンス迎賓館で
盛大な出版記念会（昭和55年）を
終えて庭園に立つ筆者

も五年ほど前に引退。よろ
めきながらさまざまな後始
末に追われているところへ
突然の朗報。約四十年前の
旧著『きもの歳時記』を再
版したいという連絡に、驚
いた。

当時の写真を選んでいた
ら、この年の歴史の半面も
発見。改めて文字に残る歴
史の大切さを痛感した次第。

鍼灸のおかげでまだまだ
やりたい仕事は山ほどあり
ますが、ひとまずこの秋の
米寿の前祝いかと喜んでい
ます。

お世話になった記念にお
役に立てばと思ひ拙著を寄
贈させていただきます。

平成二十九年三月二十九日

漢方豆知識
当帰

薬剤部 水崎晴奈



漢方薬や生薬は中国のも
の、と思われている方が多
いのではないのでしょうか。

実は日本で栽培されてお
り、なおかつ品質の良いと
される生薬があります。今
回はその代表生薬である当
帰についてのお話です。

当帰はセリ科シシウド属
の多年草であるトウキの根
を用います。トウキの根は
高さ40〜90cmで、葉はセリ
科特有のギザギザとした形
をしています。夏になると、
白い多数の小花を咲かせま
す。国内では、主に奈良県や
和歌山県で栽培されていま
す。ここで採れるものは、そ
の地名から大和当帰や大深
当帰と呼ばれており、特に
品質が良いとされています。
漢方薬の中には、名前に
当帰を含むものがありま
す。「当帰芍薬散」や
「当帰建中湯」といった処方



トウキの花

です。これらは婦人科疾患
に用いられることが多いお
薬です。当帰という生薬名
の由来にはこれと関連する
エピソードがあります。子
どもができないために実家
に戻された嫁が、当帰を服
用して妊娠できる元気な身
体になり、婚家に当（まさ）
に帰ることができた、とい
うものです。

中国の漢代の薬物書であ
る『神農本草経』にも「婦人
に多い病や子ができない時
に用いる」と記載されてお

り、その効能は古くから知られていたと分かります。

また、明の時代に書かれた薬物書である『本草綱目』には「血のめぐりを調整し、血を補う」と書かれています。

血行が良くなることで、栄養が行きわたり妊娠できない状態の身体を作ります。

他にも、冷えや痛み、便秘の改善といった作用もあります。このため、女性のみならず男性にも当帰を含む漢

方薬は多く用いられています。

日本における当帰の栽培

の歴史は古く、江戸時代には既に行われていたようです。当時から、入浴剤や薬酒として広く人々の健康を助けてきました。現代でもトウキの葉を利用した飴やハーブソルト、化粧水などが作られています。

次号では、和歌山県で栽培された当帰の加工についてお話しさせていただきます。

ツボの効用

隠白 (いんぱく) 穴 (いんぱく)

鍼灸診療部

石原 武



太陰脾経の脈は足の親指の端から起こります。今回はその第一番目の経穴である「隠白 (いんぱく)」穴を紹介いたします。このツボの正式な位置の説明は足の第一指の末節骨の内側、爪

甲角の近位内方0.1寸、爪甲内側縁の垂線と爪甲基底部の水平線の交点ということです。わかりやすく言えば図のごとく足の親指で

爪の生え際にあたります。隠白穴は手足の指先に存在する井穴 (せいけつ) の一つで、井戸から水がこんこんと湧き出るように生命力が湧き出るツボといわれます。名前の由来は隠の「かくす」という意味と、白は五指の内側白肉の際にあることで命名されたといいますが、他説もあって正確なところはわかりません。

なお別名で鬼坐、鬼眼、陰白とも言うようです。

適応症には月経過多、胃痙攣、子宮痙攣、鼻出血、腹張、嘔吐、腹泄 (腹くだり)、喘満 (呼吸困難症状に胸部の圧迫感が加わった症状)、糖尿病、イライラ感、慢性の小児のひきつけ、足寒痺不仁 (足の冷えと痺れや感覚が鈍い) などがあります。

隠白穴は指端のため鍼を深く刺入するとか、大きな灸をたくさん行うところではありません。現在は瞬間的にごく浅い鍼を行うか、井穴刺絡という特殊な形状の鍼を用い、ほんの少量の血液を出して末端の血液循環の改善を図り自律神経を整える療法、また糸状灸といつて糸のように細く小さな



く捻った艾を直接少量用いるなどの治療法で行うことが多いようです。

今年の2月頃に、以前から足先に痺れがあつて感覚が鈍く足が冷えて、その上指先に「しもやけ」まで発症しておられたご高齢のご婦人の患者様がおいででした。そこで1週間に1度、通常の身体の状態を整える治

古医書のはなし

内藤希哲と『医経解惑論』

北里大学客員教授

小曾 戸 洋



療に加え、足底への温灸とともに隠白穴へ糸状灸を3壮行うことにしました。3回目の治療で血行が少し良くなり、しもやけも改善しはじめて痺れも楽になってきて、とても歩行しやすくなったとのことでした。私共もこれから隠白穴をさらに治療に活用していきたいと思つています。

内藤希哲 (1701~3) は名古屋玄医、後藤良山、香川修庵らに続き『傷寒論』の研究に手を染めたいわゆる古方家ですが、『黄帝内経 (素問・靈枢)』『難経』『神農本草経』『傷寒論』『金匱要略』は同一の思想理論で貫かれているという五経一貫説を主張しました。他の古方派とは全く一線を画する異才といつていいでしょう。

内藤希哲は信州の松本村

に生まれ、字は師道、泉庵と号しました。同郷の清水某に医学を学び、江戸に出て3年間、医学を営みました。儒の復古学を提唱した太宰春台 (1680~1747) より年少ではありますが信州出身のよしみで親交をもち、自著の『医経解惑論』の漢文添削を春台に依頼しました。しかし『医経解惑論』の原稿が完成する前、末巻の半分まで脱稿した時点の享保20年 (1735) 秋に

希哲が『医経解惑論』と並行して筆を起こしたとされる『傷寒雑病論類』



安永5年(1776)刊『医経解惑論』

『医経解惑論』は希哲没の数十年後、安永5年(1776)に至って刊行をみまし(錯簡重訂学派)、すなわち方有執の『傷寒論条弁』、喻嘉言の『傷寒尚論篇』、程応旄の『傷寒論後条弁』ほかの影響のもとに著された、わが国早期の『傷寒論』『金匱要略』の総論的研究書です。

希哲が『医経解惑論』と並行して筆を起こしたとされる『傷寒雑病論類』は、はじめ原書名を『金匱玉函経類編』と称し、太陽病篇3巻・陽明病篇1巻・壊病篇2巻の計6巻を執筆したところで希哲は34歳にして没。その後を門人よって翌元文元年(1773)6)12月に『医経解惑論』の序を書き上げました。その春台自筆原稿が現存しています。

林藩医の大島仲和(名は燮)が小島本に刪定を加えて全13巻とし、文政2年(1819)に刊行されました。本書は『傷寒論』の条文を類もって再編成し注解を加えたもので、総論である『医経解惑論』に対する各論といえます。



当研究所へ寄贈いただいた『さもの歳時記』

今回初めて当センターに受診されている患者様に執筆されました。昭和51年『漢方と鍼』始まって以来、初めての企画となりました。中島様、ご執筆ありがとうございました。『さもの歳時記』の寄贈と併せて御礼申し上げます。

米寿を迎えられるとのこと、これからも益々元気に趣味を楽しみながらお過ごし下さい。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

『さもの歳時記』

編集後記

今月初めて当センターに受診されている患者様に執筆されました。昭和51年『漢方と鍼』始まって以来、初めての企画となりました。中島様、ご執筆ありがとうございました。『さもの歳時記』の寄贈と併せて御礼申し上げます。

○株式会社世界文化社『家庭画報5月号』「冷え対策をすることで、老化も予防できる」伊藤 剛

○ベストセラーズ『健康一人7月号』「体の部位別「血流改善」のツボ」伊藤 剛

○フジテレビ『フルタチさん』「漢方ドック」平成29年3月5日(日) 小田口 浩、緒方千秋

メディア紹介

東洋医学総合研究所 外来案内 漢方鍼灸治療センター

休診日：日曜日・祝祭日・年末年始(12/29～1/3)
ホームページ：http://www.kitasato-u.ac.jp/toui-ken/

代表：03-3444-6161
予約電話：03-5791-6169
(月～金) 8:30～17:00
(土曜日) 8:30～12:30
お薬に関するの問い合わせ：
03-5791-6167

漢方科

(平成29年7月～)

鍼灸科

	月	火	水	木	金	土 ^⑤
午前	花輪 ^① 星野 石毛	花輪 鈴木 石毛	花輪 ^② 及川 川鍋 齋藤	花輪 小田口 及川	伊藤 ^④ 鈴木 森	小田口 及川 鈴木 星野 森 川鍋 石毛
午後	鈴木 ^③ 川鍋	伊藤 ^④ 鈴木 ^③ 川鍋	星野 ^③ 石毛 齋藤	小田口 及川 五野	伊藤 ^④ 伊藤 ^④ 星野 森	

	月	火	水	木	金	土 ^⑤
午前	伊藤 ^④ 石原 黒岩 小山	柳澤 石原 小山	石野 石原 井田 黒岩	伊藤 ^④ 石原 小山	石原 井田 黒岩 小山 近藤	伊東 石原 井田 黒岩 伊藤 ^④
午後	石原 井田 小山 近藤	井田 黒岩 伊藤 ^④ 小山 近藤	石原 伊藤 ^④ 霜降	井田 黒岩 伊藤 ^④ 小山 近藤	伊藤 ^④ 石原 伊藤 ^④ 小山	

初診受付時間

漢方科	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～10:30	8:00～10:30
午後	12:50～15:00	

鍼灸科

鍼灸科	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～10:00	8:00～10:30
午後	12:50～14:30	

再診受付時間

漢方科	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～11:00	8:00～12:00
午後	12:50～15:30	


鍼灸科

鍼灸科	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～11:00	8:00～11:30
午後	12:50～15:30	

漢方ドック

漢方ドック	月～金(完全予約制)
	9:00～15:30

漢方と鍼 第167号
発行日/平成29年7月1日
発行人/小田口 浩
編集/北里大学東洋医学総合研究所
漢方と鍼編集部 代表・星野 卓之
東京都港区白金5-9-1
代03(3444)6161



WEBサイト

※青字は男性医師または男性鍼灸師
赤字は女性医師または女性鍼灸師
※専門外来では一般の患者様の診療も行っています。

①：月曜日午前の花輪医師の外来は、初診のみとなります。
②：水曜日午前の花輪医師の外来は、第2水曜日が休診となります。
③：金曜日午後(第1・3)の伊藤(剛)医師の冷え症外来は初診のみとなります。
④：第2・4金曜日のみとなります。
⑤：土曜日の外来は交代制となります。スケジュールはホームページまたは予約電話へお問い合わせ下さい。

(制作/機博委託)